

福祉心理学特論

単位数

履修方法

配当学年

4単位

R

1・2年

担当教員

佐藤 俊人

■授業のテーマ

心理学と社会福祉の接点

■授業の目的

福祉の現場において心理的支援を考える際に重要になる「対象者の無気力状態」の発現のメカニズムを理解し、その予防と具体的な対処法を修得する。

■授業の到達目標

- ・心理学の諸現象を、専門用語を使わずに自分らしい表現で説明することができる。
- ・福祉心理学における理論や研究を、実学的な視点から実践するプランを提案することができる。

■授業の概要

人間のQOLを向上させるためには、社会的援助システムを充実させるとともに、その心理的背景についても十分に考えておかなければなりません。心理学には、人間のこころの仕組みについて様々な理論が研究されてきましたが、その理論を使って実際に心理的支援を行う場合には、その人が今おかれている環境や生きてきた歴史、周囲を取り巻く人々など、様々な要因によって支援方法を変えなければなりません。効果的な心理的支援を通して、その人らしい生活をしてもらえるようになることが福祉心理学の課題です。

この講義では、「無気力からの回復」を視点として、まず人間のモチベーションに深くかかわっている様々な理論を概観します。しかし、人間の行動や考え方は、その人のそれまでの人生の歴史全般が関わっているものですので、それらの理論がすぐに直接心理的支援に結びつくわけではありません。それらの理論が生涯にわたる人間の発達のプロセスとどう関連しているのかも同時に考えながら、人生の中で人を無気力にならないように、あるいは無気力から回復してもらえるような家族・子育てや高齢者も含めて生涯にわたる発達支援のあり方について考察してみてください。

■在宅学修15のポイント

テキスト 『モチベーションをまなぶ12の理論』 金剛出版

『家族の関わりから考える生涯発達心理学』 北大路書房

	テーマ(テキスト関連章)	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	モチベーションをまなぶ12の理論 序章～Theory 1	内発的動機づけの重要性を学ぶ	質の高いやる気とはどのようなものを学ぶ
2	モチベーションをまなぶ12の理論 Theory 2～Theory 3	自己決定理論と接近回避動機づけ	賞罰を使った方略の功罪を考えながら自己決定の重要性、生物としての基本的な動機づけを学ぶ
3	モチベーションをまなぶ12の理論 Theory 4～Theory 5	他者志向的動機と自動動機	モチベーションに及ぼす他者の影響の重要性について学ぶとともに、動機づけには「無意識」が影響していることを理解する
4	モチベーションをまなぶ12の理論 Theory 6	フロー理論の基本を学ぶ	私たちが何かに集中したり充実感を味わったりするフロー経験がどのような条件の下で起こりえるのかを学ぶ

	テーマ(テキスト関連章)	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
5	モチベーションをまなぶ12の理論 Theory 7～Theory 8	達成目標と有能感	課題達成におけるやる気に及ぼす目標の持つ意味や機能について学修するとともに、モチベーションに大きく関係する事故認知、有能感について学ぶ
6	モチベーションをまなぶ12の理論 Theory 9～Theory10	セルフ・エフィカシーと自己制御学修	自分の人生に影響を及ぼす状況をコントロールできるという意識や、自分から進んで積極的に行動するようになるための条件について学ぶ
7	モチベーションをまなぶ12の理論 Theory11～Theory12	学修性無力感とモチベーション理論の応用	学修性無力感のメカニズムを理解すると同時に、モチベーションを低下させずに高めるための心理的支援を考える
8	家族の関わりから考える生涯発達心理学 1章～2章	乳幼児の能力	人間の子どもが、主体的に周囲の環境と関わろうとする能力と意欲を持って生まれてくることを学ぶ
9	家族の関わりから考える生涯発達心理学 3章～4章	親と乳幼児のコミュニケーション	人間の子どもが、親と子ども相互のやり取りの中で育つ存在であることを学ぶ
10	家族の関わりから考える生涯発達心理学 5章～6章	家族や社会の中での発達	児童期から青年期前期において大切な社会とのつながりについて概観し、この時期までにすでに無気力な状態にならないことの重要性を学ぶ
11	家族の関わりから考える生涯発達心理学 7章～8章	変化する社会の中でのアイデンティティ	社会の状況が変化した近年、キャリア形成や恋愛、結婚観などにも変化が生じてきた歴史を再考する
12	家族の関わりから考える生涯発達心理学 9章	家族の発達①	家族心理学的な視点から、家庭生活における個々の役割やストレス、家族関係が及ぼす子どもへの影響について概観する(親になること)
13	家族の関わりから考える生涯発達心理学 10章	家族の発達②	家族心理学的な視点から、家庭生活における個々の役割やストレス、家族関係が及ぼす子どもへの影響について概観する(家族と子どもの発達)
14	家族の関わりから考える生涯発達心理学 11章～12章	家族の発達③	家族心理学的な視点から、家庭生活における個々の役割やストレス、家族関係が及ぼす子どもへの影響について概観する(家族と父親の発達)
15	家族の関わりから考える生涯発達心理学 13章	老年期の心の変化	老年期における心身の変化や喪失について概観し、その変化により無気力にならないためにはどのような心理的支援が必要かを考える

■レポート課題

課題 1	「人生初期における無力感の発現とその回復の心理的方法」
課題 2	「高齢者における無力感の発現の契機とその心理的対策」

※提出されたレポートは添削指導を行い返却します。

■アドバイス



人生初期とは、思春期までと考えてください。日常生活の中には、子どもに無力感を誘発する出来事が少なくありません。そのため、子どもが、直面する困難な状況になんとかうまく対処しようと努力しても、その努力が次々に徒労に終わり、ついには、当面する課題に積極的に立ち向かう勇気を失ってしまうことも稀ではありません。このような状態が「無力感」です。心理的に落ち込んだ状態です。具体的にはどのような場合に無力感が起きるか、また、元気を回復するにはどうすればよいのかを研究します。

いま、子どもの問題が多発していますが、その背景に、親子関係の質、虐待、学校の状況、友人関係など、様々な要因が指摘されています。いずれも解決の困難な問題ですが、それらを「学修性の無力感」の視点から研究してくだ

さい。きっと解決の方向を見つけることができます。

例えば、泣いても誰も助けられなければ、泣くのを止めるでしょう。人を慕っても冷たく無視され続けたら、人にこころを寄せようとはしなくなります。難しい数学の問題に出会ったとき、「この問題は難しいからやめた」と、解く努力を放棄すれば、問題は永遠に解けません。しかし、「難しいがやってみよう」と挑戦すれば、解ける可能性は残ります。学修の量よりも知的処理能力よりも、動機づけの要因の方がはるかに重要な分岐点となるのです。時には人生の別れ道ともなります。

では、挑戦への意欲を支えるのは何でしょうか。本人の意志か。意志という実体があって、エンジンの回転数を上げるか否かを決めるのでしょうか。心理学ではそのようには考えないのです。意志は独立の実体ではなく、目標の魅力、自己に対する信頼、社会的期待、周囲からの情緒的支援の有無などの要因の相互作用の産物であると考えます。だから、「頑張れ」というコトバだけで、エンジンの回転数があがるものではありません。子どもの発達に関する情報も広く集めながらテキストと関連づけて考察してみてください。

課題2 アドバイス

何らかの喪失体験や失敗体験を契機に、何もかもうまくはいかないという無力感がおきて、できるとさえやろうとしなくなります。例えば、パジャマから着替えなくなった、台所の片付けをしなくなった、新聞を読まなくなった、などの微妙な行動変化です。そのきっかけとなる出来事には、配偶者の死、転倒骨折などの大事件もありますが、義歯の具合が悪くなったなどの、一見些細な出来事もあります。いずれにせよ、これまで円滑に進行していた日常行動が挫折し、ご本人の努力と工夫だけでは、行動の建て直しができなくなると、上記のような行動変化を起こすことがあります。精神医学的には「うつ」と呼ばれますが、心理学の立場では、挫折経験の蓄積によって生じた無力感ですから、心理的な方法で修復可能なはずだと考えます。

このような行動変化がおきたとき、「頑張れ」のコトバは、時には残酷でさえあります。「うつ」に励ましは禁物であるというのが大原則です。無力感の軽減に役立つのは、むしろ周囲の情緒的支援です。

日常行動の失敗に対する対応はどう対処するのがよいのでしょうか。一つひとつの失敗を指摘するのは逆効果です。しかし、まったく指摘しないのも本人に気づきの機会を与えないことになるので、好ましいことではありません。例えば、おもらしにはどう対処すべきか。オムツを使用してなお無力感に陥らないようにするにはどうすればよいのでしょうか。

高齢者が無力感におちいる契機には、どんな出来事があるか、それによってどんな行動変化がおきるか、について具体的事例の情報も広く集めながらテキストと関連づけ、初期介入の方策としてどのような援助が効果的であるかを考えてください。

■評価の方法・基準

課題レポート（60%）、試験レポート（40%）。

心理学的な諸理論を自分なりに理解し、まとめることに加え、それを自分なりにどう考えて実践的に応用していくのかについて、どれだけ考察されているかがレポート評価の基準である。

■参考文献（*印＝大学から送付される必読図書）

*1) 尾形和男編著 2006『家族の関わりから考える生涯発達心理学』北大路書房

*2) 鹿毛雅治編 2012『モチベーションをまなぶ12の理論』金剛出版